

平成 30 年 6 月 24 日現在

機関番号：32629

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07203

研究課題名(和文)新出土資料から見た上古中国語声母研究—以母・preinitial *s-を中心に

研究課題名(英文)A Study of Old Chinese Phonology and new excavated documents: Yimu and preinitial *s-

研究代表者

野原 将揮 (NOHARA, Masaki)

成蹊大学・法学部・准教授

研究者番号：80728056

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は上古中国語(特に戦国時代)の音韻体系のうち、いわゆる以母(中古音 y-) の上古音と preinitial *s- について考察を加えることを目的とする。2016年は T-type と L-type について再検証し、以母を *d- から *l- へと置き換える仮説を検証。また preinitial に関して、出土資料の「訊」を例に西の声母に *sn- を再構。2017年は「上古音以母」に関して初歩的な検討を加えた。以母が上古の2種以上(L-type と口蓋垂音) の声母に由来することを再確認し、由来不明の以母を再構するための仮説を新たに示した。また「鉄」についても検討を加えたが、この点についてはさらなる検証を要する。

研究成果の概要(英文)：This study tried to reconstruct the "Yimu (Middle Chinese y-) " and the preinitial *s- in Old Chinese. This study has revealed followings: (i) Yimu (y-) came originally at least from two initials in Old Chinese. This study re-examined this hypothesis by investigating the Xiesheng connections, phonetic loans seen in the excavated documents. Besides these studies, I tried to reconstruct the word "iron" in Old Chinese. (ii) the word "west" has *sn- as its onsets. Based on the Middle Chinese, the word "west" has a singleton onset *s-. Whereas, based on the resources from excavated documents such as oracle bones, bronze scripts, and bamboo slips, the word "west" had relationships with the word "to interrogate." And it had a character Ren "a person" as a phonetic element. It is concluded that the word "to interrogate" and "west" have *sn- for its onsets.

研究分野：歴史言語学 中国語音韻史

キーワード：上古中国語 上古音 戦国出土資料 出土文献 声母 以母 y- preinitial

1. 研究開始当初の背景

上古中国語の音韻体系を研究する場合、従来は伝統的な手法『詩経』等に見られる押韻の分析や諧声系列、諸文献に見える異同すなわち異文の整理が主要な研究手法であった。こういった研究手法による成果はすでに尽くされた感があり、上古音研究にはある種の閉塞感、隔靴搔痒の感が漂っていたと言わざるを得ない。

ところが20世紀後半以降になると、上古音研究をめぐる環境は一変する。中国の長江流域を中心に多くの文字資料が出土し、陸続と公刊されているからである。これらの資料はいわば「生の資料」であり、後世の手が加えられていない大変貴重な資料である。その上、時代や出土地がある程度明確であり、当時の言語を研究する際の一つの定点となるものである。そもそも「上古」と一言言ってもその期間はおよそ千年以上の幅があり、一つの時代の言語研究としてはあまりに広すぎる。しかし、このような出土資料を研究対象とすることでより現実的な言語研究が可能となったと言えよう。またこれと同時に、従来の伝統的な研究手法から得られた成果を再評価することにもなるが、出土資料を用いてみると、実際には伝統的な手法から得られた成果を支持するような事例も多く、この点は研究史の観点から見て注目に値する。

2. 研究の目的

本研究ではこれらの出土資料を中心に用いて、特に(1)「上古音以母(すなわち中古音以母の由来)」を明らかにすること、そして(2)preinitial *s-の再構の有無について検討を加えることを主たる目的としている。

(1) 「上古音以母」について

従来の諧声系列の研究によると(中古音)以母(y-)は少なくとも2つ以上(舌音系と牙喉音系)の上古音の声母(音節頭子音)に由来することが明らかとなっている。ところが、近年この仮説を否定する見解もいくつか見られる。本研究では改めて当該仮説に検証を加えるべく、諧声系列の整理に加え、出土資料に見える通仮(当て字の用法)を整理する。由来が異なるとされる以母の語が出土資料中で互に通仮関係にあるかどうかを見極めることで、当該仮説の妥当性を検証する。通仮関係にある場合、仮説の再検証を要するが、逆の場合は仮説を支持する結果となる。さらに中古音以母y-への合流の時期についても議論することが可能となる。

(2) 「preinitial *s-」について

諧声系列に基づくと、「修(*sliw > sjuw)」と「攸(*liw > yuw)」のように、上古音体系にpreinitial *s-を再構する例は少なくない。したがって、これを

prefix と見なすかどうかについては研究者間に意見の相違が見られるが、preinitial *s-を認めるという点については概ね一致している。しかしどの単語にpreinitial *s-を再構するべきであるかについては、単語毎に検討を加えなければならない。本研究では、一つ一つの単語に検討を加え、preinitial *s-の有無について議論することを目的としている。

3. 研究の方法

(1) 「上古音以母」について

諧声系列に基づき、T-type と L-type の仮説の妥当性を再検証する。さらにL-typeの以母とは異なる諧声系列に含まれる語、たとえば「與」や「夜」等について、出土資料に見える通仮の現象を整理する。これら二種の以母が出土資料中で通仮関係にあるかどうかにつき検証を加える。

(2) 「preinitial *s-」について

いわゆる心母の単語(中古音においてs-を頭子音にもつ語)を研究対象として、検討を加える。特に鼻音や流音とs-の関係に着目する。特に個別の単語を例に検討を加える。

4. 研究成果

(1) 「上古音以母」について

従来の研究によると、中古音以母(y-)は諧声系列や異文などの整理によると、定母(d-)との関係が深いため、中古音以母y-は定母に帰するという「喻四歸定(曾運乾による仮説)」に基づく仮説が多くの研究者によって伝統的に支持されてきた。その後、Karlgrenは中古音以母y-が上古音の3種の声母に由来するという見解を示す。たとえば「易」は上古の*d-に、「羊」は上古の*z-に、「欲」は上古の*g-にそれぞれ由来するとしている。同様の見解は、たとえば董同龢にも見えるが、具体的な単語の音価に関してはKarlgrenとはやや異なる。その後、李方桂やSchuesslerらの研究によって、Karlgrenの*d-は*r-あるいは*l-に修正される。李方桂は原則として*r-のみに統一するが、唇音と諧声関係にある以母y-については*brj-、牙喉音と諧声関係にある以母y-については*grj-というように再構する余地も残している。本研究ではまず*d-を*l-へと修正する仮説の妥当性を再検証し(T-type と L-type が通仮、諧声関係にないことを実証し、*d-の可能性を排除) L-type に由来する以母y-の再構を試みた。たとえば「余」は諧声系列によると、端母tr-、知母tsy-と諧声関係になく(すなわちT-typeを再構する条件を欠く)以母y-や船母zy-と諧声関係にある。よ

って、「余」はL-typeに由来する以母y-と推定され、*laと再構される。さらに舌音(T-typeやL-type)と諧声関係になく、牙喉音(軟口蓋音)と諧声関係にある以母y-の整理を行った。たとえば以母y-「羊」は見母k-「姜」や溪母kh-「羌」等と諧声関係にあるが、舌音とは諧声関係にない。この場合、Baxter and Sagart (2014)等は「羊」に関連する語に口蓋垂音を再構する口蓋垂音仮説をとる(潘悟雲による仮説を修正したもの)。同様の例にはたとえば見母k-「谷」と以母y-「欲」、邪母z-「俗」の諧声関係などがある。本研究では「夜」を例にこの種の以母に検討を加えた。その結果、「夜」は下記のように、舌音系とは関係がなく、寧ろ牙喉音系声母の語と密接な関係にあることがわかる(特に「與」については大西克也氏による重要な研究がある。):

- 「夜」 「亦声」(『説文解字』)
「敎」 「或从亦」(『説文解字』)
「夜」: 通仮{擧}(清華簡『耆夜』)
「夜」: 通仮{敎}(上博『昔者君老』)
「擧」: 通仮{敎}(郭店『成之聞之』)
「擧」: 通仮(異体字?) {擧}(上博『恒先』)

しかもこれらの語はL-typeのような舌音系の語と関係がない。よって本研究では下記のような仮説を示した:

【仮説】戦国竹簡においてL-type(舌音系声母)と通仮する以母はL-typeに由来する以母と推定される。口蓋垂音あるいは軟口蓋音(牙喉音系声母)と通仮する以母は口蓋垂音に由来する以母と推定される。

当該仮説に基づけば、いわゆる「由来不明の語(復元強度の低い語)」についてもその再構の確度を高めることが可能である。

課題

近年、このような以母y-を幾つかの上古音声母に由来するという仮説に疑義を唱える研究者もあるが、これについては別の観点(義通換読、同義換読)からの検討を要するため、今後の課題とした。

(2) 「preinitial *s-」について

現在多くの研究者が諧声系列に基づき、preinitial *s-の再構を認めている。preinitial *s-の大部分が鼻音や流音との関係が深い、*st-のように閉鎖音の前に置かれることもある。

問題点

諧声系列に基づき、preinitial *s-を再構する点については基本的には問題

ない(ただし諧声関係が後世のものであり、preinitial *s-を否定する必要がある場合もある。たとえば「喪」と「亡」等)。ところが、一部の語はそもそも鼻音や流音と諧声関係にないため、preinitial *s-を再構する理由も根拠も見当たらない。その場合は、中古音の音価に基づき、上古音を投影するほかない。たとえば「西」や「休」については、中古音(心母s-)に基づき、その上古音も*s-と再構する研究者がほとんどである。また中国諸方言に目を向けても、[s]や[ʃ]、あるいは[ʃ]のような摩擦音で実現され、これらは中古音のs-から音変化を経た結果と推定される。このように「西」や「休」等からは鼻音や流音の痕跡は見いだせない。

出土資料を用いた検証

のような場合、大部分の単語は*s-と再構するほかないが、本研究では出土資料に見える例を用いて、preinitial *s-の痕跡を探った。

「西」について

すでに述べたとおり、多くの研究者が「西」を*s-というように再構する。ところが、「西」を文字構成要素に持つ字を詳しく見てみると「洒」という文字が見え、これは中古音泥母(n-)である。「西」と「洒」の諧声関係を認める研究者はあまり多くないが、これを諧声関係と認めるならば、「西」を*sn-と再構する余地があることがわかる。「洒」のほかに、「西」を文字構成要素に持つ字として重要なのが、「訊」の古文「𠂔」である。

「訊」の古文「𠂔」について

「𠂔」の「西」は声符である可能性が高い。さらに興味深いことに、「訊」の甲骨文、金文を見てみると、「訊」は「人」を声符に持つと思われる字から構成されることがわかる。「人」は泥母/日母(*n-)である。してみると、次のような仮説が考えられる:

【仮説】「人」を文字構成要素(声符)にもつ「訊」も上古では*sn-という声母を有していた。その場合、「訊」の古文である「𠂔」も*sn-という声母であったはずである。よって「𠂔」の文字構成要素である「西」も*sn-という声母を有していた蓋然性が高い。

実際に出土資料中では「𠂔」が{迅}を表すように、「𠂔」は「訊」「迅」等と関係が密接である。また「西」を声符に持つ「洒」が中古音書母(sy-)である点も「西」が*sn-であったという仮説を支持する。上古の*s-が中古でsy-に音変化する例が存在しないからである。中古書母sy-に変化する上古声母は*st-、*hl-、*hn-、*hng-等である。この点から見て

も、「西」が*sn-という声母を有していたことがわかる。

課題

このように preinitial *s-を認める場合、各単語に詳細な検討を加えなければならない。また preinitial がそもそも prefix かどうかについてもさらなる検討を要する。シナ・チベット語を射程に収める場合、prefix を推定する研究者も少なくない。上古中国語の段階では、統語的に説明できる余地も残されており、prefix を推定するかどうかについては今後のさらなる研究を必要とする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

Nohara, Masaki, Old Chinese "west": *sn^ɕər、*Language and Linguistics*. Institute of Linguistics, Academia Sinica、査読あり、(in press)

野原将揮、「上古音以母」再構に関する初步的考察、『稲畑耕一郎教授退休記念論集』上巻、早稲田大学中国古籍文化研究所、2018年、379-393

Nohara, Masaki, Preliminary report on the reconstruction of the word "iron" in Old Chinese Phonology、*Studies in Asian geolinguistics*、Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA) Tokyo University of Foreign Studies、2017年、52-56

野原将揮、再論上古音 T 類聲母與 L 類聲母、『古文字與漢語歷史比較音韻學』、復旦大学出版社、2016年、69-79

[学会発表](計 2 件)

野原将揮、構擬上古音以母、The 25th Annual Association of the International Chinese Linguistics、2017年、Budapest, Hungary

野原将揮、構擬"少"字音、古文字與音韻學研究工作坊、2016年、華東師範大学

[図書](計 件)

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野原 将揮 (Nohara Masaki)
成蹊大学法学部・准教授
研究者番号：80728056

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()